

ライフサイクル論と成人教育

——成人の学習内容の解明を中心に——

葛 原 生 子

(広島大学大学院)

はじめに

本論文は、ライフサイクル論の知見に基づいて、成人の学習内容を解明していこうとするひとつの試みである。

研究の手順としては、まず第1章で、ライフサイクルの研究の特徴と知見を明らかにする。そして、その中から、成人の学習内容を解明する手がかりになるとと思われる「発達課題」と「トランジション (transition)」という2つの概念をとりあげ、第2章と第3章で、その両者からのアプローチを試みたい。

1 ライフサイクルの研究

ライフサイクル (life cycle) という用語は、現在、様々な文脈において、様々な用いられ方をしている。また、ライフサイクルの研究者たちも、それぞれ異なる立場や視点からライフサイクルをとらえ、独自のライフサイクル論を展開している。そこで、本章では、まずライフサイクルの基本的な考え方と、これまでになされてきたライフサイクルの様々な研究の成果を要約し、ライフサイクル研究の特徴と知見を明らかにする。

ライフサイクルという用語の語源にまでさかのぼり、その基本的な考え方を明らかにしたのはレヴィンソン (Levinson, D. J.)⁽¹⁾ である。彼によれば、ライフサイクルという語には、次の2つの基本的な考え方が含まれている。その第一は、「出発点⁽²⁾ (誕生, 始まり) から終了点 (死亡, 終わり) までの過程または旅という考え方」であり、第二は、「ライフサイクルを一連の時期または段階に分けてとらえる“季節”⁽³⁾ という考え方」である。ひとが生まれ死に至るまでの生き方は千差万別である。しか

し、その基底には、出生→成長→成熟→老衰→死亡という普遍的な生命現象をはじめとする一定のパターンが存在する。これは原則としてすべての人の一生において繰り返され、次の世代へと受け継がれていく。そして、その一生の過程においては、特徴的な節目と変化が見い出され、その節目を境界線とした各々の時期は、質的に異なり、独自の性格をもつ季節としてとらえることができるということなのである。

このように、人間の一生を「誕生」という出発点から「死亡」という終了点までの過程としてとらえ、そこに節目と変化を見るライフサイクルの考え方は、決して新しいものではない。古くは、古代ヘブライ、中国、ギリシャの古人の知恵、及びインドのヒンドゥー教の教えの中に見い出される。

しかしながら、人間のライフサイクルが、社会科学的研究の対象となり、今日のライフサイクル論につながる研究成果が出され始めたのは、今世紀に入ってからである。ライフサイクルの社会科学的研究の発端⁽⁵⁾を、1920年代のビューラー (Buehler, C.) とする研究者もいるが、一般的には、1930年代に、ユンク (Jung, C. G.) によって始められたと考えられている。ユンクは、多くの精神分裂者の治療を通して、人生の転換期が35歳と40歳の間に起こると考えるようになり、40歳をライフサイクルの「正午」と呼んで、それ以前の時期を人生の午前、それ以後の時期を人生の午後とした。そして、人生の午前と午後⁽⁷⁾の目的は異なり、同じプログラムに従って生活することはできないことを指摘した。ユンクの貢献は、人生の正午を頂点として、名誉、権力、名声、そして女性の愛に特徴づけられた壮年の男性像を中心にとらえられ、人生の午後が低く評価されがちであった当時において、人生の午後を「社会的な一般的評価とかかわりのない真の個性を見出してゆける」⁽⁸⁾時期として、人生の午前とは異なる独自の価値を認めたことである。ユンク⁽⁶⁾の研究者である河合は、このようなユンクの見解が、「強いことはよいことだ式の考えではなく、強いことも弱いことも、善も悪もそこに含みこんだ全体的な世界観を人生の軌跡全体にわたってもうとうとする」⁽⁹⁾ライフサイクルの考え方の出発点になり、この次に述べるエリクソン (Erikson, E. H.) のライフサイクル論にも受け継がれていると指摘している。

ライフサイクル論における次の偉大なステップは、1950年代に、エリクソンによってもたらされた⁽¹⁰⁾。エリクソンは、フロイト (Freud, S.) の発達段階の理論を踏まえながらも、ユンクの考え方を取り入れることによって、人間の成長を一生の過程としてとらえ直し、さらに社会心理学的観点を加えて独自のライフサイクル論を確立した。彼は、人間の一生の成長を、人生のある一定の段階における個々人の発達を支配する、連続する8つの心理社会的課題 (psychosocial tasks) を達成するプロセスとみた。そして、この8つの課題は、「危機 (crisis)」としてとらえられ、この危機

を段階的に通り抜けて、人間の健康なパーソナリティは完成していくと考えられている。したがって、ある段階の課題がうまく解決できなければ、その失敗は永続的な問題をつくることになるのである。ライフサイクルの図式を完成し、ライフサイクルをよりわかりやすい形で提示することに成功したエリクソンのライフサイクル論は、人生8段階説と呼ばれ、ライフサイクル論と言えばエリクソンと言われるほど大きな影響力をもつにいたった。このエリクソンの理論をもって、これまでの、主として精神分析学による自我の発達領域に属するライフサイクル論は、集大成されたと言えるであろう。

ライフサイクル研究の次の段階は、1970年代におとずれる。1960年代後半から、特に、1970年代にかけて、ニューガルテン (Neugarten, B. L.), グールド (Gould, R.), シーヒー (Sheehy, G.), 及びレヴィンソンなどによって、数多くのライフサイクル研究の成果が報告されている。これらの研究の特徴は、第一に、調査研究に基礎づけられていること、第二に、学際的研究方法がとられていること、第三に、成人期を研究対象としていることである。

ニューガルテンは、¹³カンサスシティに住む40歳から75歳までの男女を対象に調査研究をおこなった。その研究結果をもとに、成人期におけるパーソナリティの変化を説明するためには、生物学的モデルは不適切であり、別の社会的枠組が必要であると述べ、社会的時計 (social clocks) という概念を提出した。この概念は、ある特定の社会においては、ほとんどの人々によって支持されている生活上の出来事のタイムテーブルがあり、そのタイムテーブルを規定する平均年齢や年齢期待が刺激剤となって、生活上の出来事を急がせたり、遅らせたりして、人々の行動を制御するというものである。そして、ニューガルテンは、同じ年齢段階の全ての人々に起こるパーソナリティ変化の順序を発見するためには、生物学的時計と同時に社会的時計をみななければならないと述べ、ライフサイクルを包括的にとらえる場合には、この社会的時計が重要であると指摘している。ニューガルテンの貢献は、社会的時計の概念を明らかにし、ライフサイクルの時期区分の指標として、年齢段階を導入したという点である。

¹⁴グールドは、UCLA Psychiatric Outpatient Clinic のグループセラピーに集まった患者を、16～18歳、18～22歳、22～28歳、29～34歳、35～43歳、43～50歳、50～60歳以上の7つの年齢段階に区分して、成人前期から中年期までの男女の研究をおこなった。その研究結果から、ライフサイクルの一般的パターンを見出したのである。この研究の意義は、ライフサイクルの各時期の特徴が予想可能なものであることを示唆した点であり、ここで明らかにされたパターンは、その後のほとんどのライフサイクル研究に受け継がれている。

¹⁵次にシーヒーは、18歳から55歳までの男女115人に対するインタビューをもとに、

思春期以後の人生は、長いプラトールではなく、そこに生じる崩壊、あるいは建設的変化を伴う危機の時期は、単に予想可能なだけでなく、成長を意味する望ましいものであることを指摘し、ライフサイクルの各時期の間の「トランジション (transition)」に着目した。そして、シーヒーは、特に、これをパッセージ (passage) と呼んだ。シーヒーの貢献は、それまで「危機」という言葉が示すような、マイナスのイメージをもたれていたライフサイクルの各時期の移行を、成長への機会として積極的に評価したことである。

最後に、レヴィンソン¹⁰⁹は、30代中頃から40代中頃までの40人の男性の生活史を面接調査によって探り出し、それぞれの個人史を作成すること——レヴィンソンは、この研究方法を「伝記的面接法 (biographical interviewing)」と名づけた——を通して、男性のライフサイクルのパターンを明確にすると同時に、それを年齢に関連するタイムテーブル上に位値づけた。彼は、ライフサイクル全体を、児童期と青年期 (0～22歳)、成人前期 (17～45歳)、中年期 (40～65歳)、及び老年期 (60歳以降) の4期に区分し、これらの時期を「発達期 (developmental periods)」と呼んでいる。この発達期は、ライフサイクルを全体としてとらえる場合の巨視的な枠組であり、各発達期には、さらに発達段階によって区分されている。各々の発達期は、相互にオーバーラップしながら約25年間続いているが、このオーバーラップした時期は、2つの発達期の橋渡しの時期として「過渡期」と呼ばれている。これらの過渡期も含めて、ライフサイクルの微視的な枠組である発達段階を、レヴィンソンは、「生活構造」という概念でとらえようとした。生活構造とは、「ある時期におけるその人の生活の基本的パターンないし設計のこと」である。彼は、生活構造が比較的安定している発達段階を「安定期」と呼び、生活構造に顕著な変化がおこる発達段階を「過渡期」と呼んで、その両者が交互に継続的にあらわれてくる過程として、ライフサイクルをとらえ図式化したのである。また彼は、各々の発達段階が、その段階独自の発達課題によって決まることを指摘した。レヴィンソンの研究は、1970年代のライフサイクル研究の総括とも言えるべきものであり、ニューガルテン、グールド、及びシーヒーらの貢献を含みながらも、彼独自の調査研究に基づいて、現代社会における成人をとらえる上で最も現実的なライフサイクル論を提出した意義は大きい。

以上、ライフサイクルの基本的な考え方と様々なライフサイクルの研究について考察してきたが、これらに基づいて、ライフサイクル研究の特徴と知見をあげると、次の4つにまとめることができると思われる。その第一は、人生を、生涯の展望に立ってみようとしていること。第二は、人生の各時期の特徴が予想可能なものであるということ。第三は、ライフサイクルの研究は人間の様々な側面における加齢 (aging) に伴う「変化」の研究であり、その変化こそ、成長の機会を提供するものであるという

こと。そして第四は、人生の各時期には、その時期独自の発達課題が存在するということである。なお、ここであげた4つの点は、並列的なものではない。第一の知見の上に第二の知見が、第二の知見の上に第三の知見が、というように積み重ねられたものである。したがって、第三と第四の知見の中には、第一と第二の知見が包摂されているのである。

このようなライフサイクル研究の特徴や知見の中で、成人の学習内容を解明する手がかりを与えるものとして、我国でもしばしば用いられてきたのが、四番目にあげた「発達課題」の概念である。生涯の各時期ごとに学ばなければならない課題が生じるという、発達課題の考え方は、ハヴィガースト (Havighurst, R. J.) 著、莊司雅子訳『人間の発達課題と教育』(1958年)⁽⁹⁾によって我国に紹介されたが、「おそらく生涯教育論が導入された昭和四十年代より後に、しだいにその考え方が、特に成人の学習内容編成に指針を与える根拠として用いられるようになった」といわれている。

もうひとつ、成人の学習内容を解明する手がかりを与えるものとして最近注目されてきているのが、第三の知見と関連する「トランジション」の概念である。この概念は、日本語で「過渡期」とか「移行」とか訳されているが、ライフサイクルの節目、すなわち特に変化の顕著な時期、あるいはその変化そのもののことを指す。アスラニアンとブリッケル (Aslanian, C. B., and Brickell, H. M.) は、トランジションが成人の学習内容を規定していることを明らかにしている。⁽¹⁰⁾

そこで、本研究では、この「発達課題」と「トランジション」という2つの概念に着目して考察をすすめていくことにする。

2 発達課題からのアプローチ

まず最初に、発達課題からのアプローチを試みたい。発達課題が、これまでも成人の学習内容を設定する場合に、しばしばその理論的根拠とされてきたことについては前章ですでに述べた通りである。しかし、それにもかかわらず、成人の発達課題についての具体的な説明は、これまであまりなされることがなかった。そこで、本章では、まず成人の具体的な発達課題を明らかにし、それに基づいた成人の学習内容について検討していくことにする。

(一) 成人の発達課題

成人の発達課題については、ハヴィガーストの『人間の発達課題と教育』の中でも言及されている。しかし、その後成人期に焦点をあてたライフサイクルの研究が次々と発表され、ハヴィガーストは、その著書の発表後約30年たった1981年に、チッカ

リング (Chickering, A. W.) との共同研究によって、思春期後期・青年期 (16～23歳) 以降の発達課題を設定し直している (表 1 参照)。ここでは、この新しい研究に基づいて、成人の発達課題を概観していきたい。

表 1 成人の発達課題

時 期	発 達 課 題
思春期後期・ 青年期 16～23歳	1 情緒的自立を達成すること 2 結婚と家庭生活の準備をすること 3 職業を選択し、準備すること 4 倫理体系を発達させること
成人前期 23～35	1 パートナーを決めること 2 家族をもつこと 3 家庭を管理すること 4 職業に就くこと 5 市民としての責任を引き受けること
中年への過渡期 35～45	1 時間的展望の変化に対処すること 2 職業プランを変更すること 3 家族関係を再定義すること
中年期 45～57	1 職業の維持と新しい職業を発展させること 2 家族関係を再び安定させること 3 成熟した市民としての貢献をすること 4 身体的変化に対処すること
老年への過渡期 57～65	1 引退の準備をすること
老年期 65+	1 引退に対処すること 2 健康と体力の減退に対処すること 3 高齢者集団と特別の関係をもつこと 4 満足する生活環境を確立すること 5 配偶者の死に対処すること 6 完全性を維持すること

思春期後期・青年期の発達課題の第1は、「情緒的自立を達成すること」である。この課題は男女両方の課題であるが、女性にとって、特に注意すべき課題である。伝統的な性別役割期待は、女性に「自我拡散」の維持を要求し、この課題の達成を妨げる。このことは、短期的に見れば、多くの男性の要求とも一致し、好都合で苦痛が比較的少ないように思われるが、後に大きな問題を残すことになる。したがって、女性

の精神的自立の達成は、この時期の重要な課題である。「2 結婚と家庭生活の準備をすること」は、結婚と家庭生活における選択可能性の増大やそれに対する期待の変化によって、次第に複雑になってきている。もはや独身か結婚かという二者択一の問題ではない。まだほとんどの人が結婚し家庭をもつけれども、その時期や形態や役割は柔軟になってきている。また、結婚に対する期待も、伝統的な結婚や役割における幸せよりも、両者の人格、職業、および趣味の発展に向けられるようになってきつつある。「3 職業を選択し、準備すること」は、現在では、この時期だけに特有の課題ではなく、ライフサイクルを通じて異なる時期に繰り返しあらわれる。ある特定の職業に必要な知識や技能は、急激に時代遅れなものになっていき、産業構造の変化によって、かつてあった職業がなくなったり、新しい職業が生まれてくることもある。したがって、この時期の職業の選択と準備が、その後40年から50年間続く職業生活を通して有効であることは不可能であり、ライフサイクルの他の時期における職業の再検討、再訓練は不可欠である。また、労働、および職業という言葉の意味そのものが変化してきている。かつては、衣食住供給の手段であったものが、現在では、自己の能力を十分に発揮することにも大きな関心が向けられるようになってきた。職業の選択には、自己実現、収入、社会への貢献が考慮されなければならないのである。「4

倫理体系を発達させること」は、アイデンティティの確立と関連している。権威、仲間、および社会の規範集団によって供給された倫理体系を意識するようになり、その内容を検討して、自分の職業、ライフスタイル、および大きな社会的文脈に合うようにつくり直そうとし始める。そして、その自分自身の中に見い出される複雑な文脈にそって、自分に可能な最善の信念と行動の体系を徐々につくりだしていかなければならない。

成人前期の「1 パートナーを決めること」は、前の時期の「結婚と家庭生活の準備をすること」に関連しており、その課題と同様に、次第に複雑になってきている。結婚することもあれば、結婚しないで継続的なパートナーシップを確立することもある。そして、それらへの期待は、次第に「自己」実現、「個人的」満足、および「個人の」成長と拡大に向けられるようになってきつつある。これは、伝統的な結婚において、その期待が、男性も女性も、互いに「相手」に向けられていたこととは対照的である。「2 家庭をもつこと」は、効果的な避妊の発達と普及によって、偶然性が減少し意図性が増大した。そして、他の重要なプランや希望と合わせて計画されるようになってきた。このような意図性の増大は、子どもの健全な発達や社会化にとって必要な条件整備に対する関心の増大をまねいた。現在では、出産方法から、摂食のスケジュール、しつけの方法、親子関係にいたるまで、様々な選択肢の中から決定しなければならないのである。「3 家庭を管理すること」は、よりよい家庭生活のため

に、家族の衣・食・住、財政、責任分担などをうまくやっていくことである。たとえば、食を例にしていえば、それは、単に食品を買って家族に食物を供給することを越えて、現在では、家族の多様な味覚やニーズを満たすためのダイエットや健康食品やグルメの問題にまでいたる。また、マスメディアやスーパーマーケットの普及によって、食品のチェックは複雑になってきている。「4 職業に就くこと」は、前の時期の「職業を選択し、準備すること」と関連しており、職業に対する期待の変化の影響を受けている。人々は、ますます職業を通じて自己の能力を十分に発揮したいと思うようになってきているにもかかわらず、労働市場には、刺激に満ちた仕事よりも、精神的に満たされない仕事が多い。その結果、人々は、仕事にはできるだけ時間、エネルギー、および感情を費やさないようにして、地位や楽しみや人格の成長は、何か他のものに求めるようになってきている。「5 市民としての責任を引き受けること」は、地域社会の組織に参加したり、ボランティア活動をすることである。そしてこれは、家庭生活、および職業生活の後に残された時間やエネルギーに依存している。

中年の過渡期の「1 時間的展望の変化に対処すること」は、この時期がちょうど人生の折返し点であることと関係している。この時点まで、すなわち人生の前半における時間的展望は、生まれてからの時間の感覚でとらえられ、未来は無限に伸びているようである。しかし、この時期を境にして、死までの時間の感覚に変わり、人生に残された時間が有限であることを実感するようになる。そして、これをきっかけにして、人生後半の最優先事項が何なのかを、自分に問い直さなければならなくなるのである。「2 職業プランを変更すること」は、この時期がある特定の職業や専門に従事して、約15年から20年を経ていることに関係している。一つの職業や専門に15年から20年間従事すれば、ある一定のレベルに到達し、それ以上の発展はあまり望めなくなる。問題は、その時、自分が同じ職業を今後も続けていきたいと欲しているかどうかである。また同時に、変更することができるかどうか、どうすれば変更できるかも問題になる。職業の変更は、年をとるにつれて困難になってくる。この時期に変更しなければ、たぶん退職までこのことに悩まされ続けるだろう。また、学校卒業後結婚し、この時期に子育てを終えた女性にとっては、初めて職業に目を向けることになるかもしれないし、結婚、および出産前に職業に従事した経験のある女性にとっては、再就職を考える時期である。この時期は、男性にとっても女性にとっても、職業プランを考え直す時なのである。「3 家族関係を再定義すること」は、この時期が子どもが家を離れる時期であることと関連している。これまで、家庭では子どもの父親・母親であったものが、子どもたちが家を離れることによって、再び夫と妻の関係にもどり、ふたりだけの生活が始まる。この時、お互いを再発見し合い、新しい生活をエンジョイすることができるかどうかである。子どもたち以外に共通の関心がないこと

に気づき、お互いに関係していた絆が切れてしまうこともある。この時期は、お互いがお互いにとってふさわしい相手なのかどうか、またお互いにどう変わっていけば、これからの第二の人生と一緒に生きていくことができるのか、といった夫と妻の関係を再定義する時なのである。中年への過渡期は、人生の折返し点にあたり、この時期の課題は全て、これまでの人生をふり返って検討し直し、これからの新しい人生に向けて、出発の準備をするための課題であるといえよう。

中年期の「1 職業の維持と新しい職業を発展させること」は、前の時期の「職業プランを変更すること」と関連している。その時、同じ職業を継続することを決心したなら、中年期は最も高い地位や収入を達成する時期となり、仕事への関心は、達成から人間関係に移ってくる。自分の達成から他の人の職業的發展や達成への関心の変化といってもよい。これらの人々にとって、この時期は、後輩の後援と指導にあたる時である。これに対して、職業を変えたり、新しく職業に就いた人々の課題は、仕事の達成水準や地位や収入を維持することではなく、新しい職業上の役割、技能、およびシステムを学習することである。職場を変えたり、新しい職業を開発するこれらの人々にとって、この時期は、危険性の高い時期であるけれども、刺激や自己確認や自尊心の増大や有能感を獲得することのできる有益な時期にもなり得るのである。「2

家族関係を再び安定させること」は、この時期にいる人々が、通常、三世代家族の中心になっていることと関係している。夫と妻の関係は、この時期の間、良くも悪しくも安定している。これは、人生の後半に入って、優先権が、達成よりもパートナーや家族や友人との関係の方に向けられるようになった結果である。この時期は、高齢の親とのより楽な関係をつくっていくことが重要である。このことは、独立した自分の子どもとその配偶者との関係においても同様である。「3 成熟した市民として貢献すること」は、この時期の人々が、幅広い知識、能力、および個人的、職業的コンタクトをもっており、市民のリーダーとしての理想的な候補であることと関係している。この時期においては、男性も女性も、地域社会のリーダーシップをとり、地域社会を動かしていく強力な手足とならなければならない。「4 身体的変化に対処すること」は、この時期に、スタミナ、反応時間、および柔軟性が減退することと関連している。女性が更年期障害を経験するのもこの時期である。このような身体上的の変化は、フラストレーションや挫折感を生み出すので、身体上的の変化と同時に、心理的問題にも対処していかなければならない。また、美食やアルコール解禁の現代社会においては、この時期の食生活の調整も重要な課題である。

老年への過渡期の「1 引退の準備をすること」は、平均余命の増大に関係している。余命の変化によって、退職に対する選択可能性や選択権が増加した。また、余命の延長は、これからまだ人生の多くが残されていることを意味する。したがって、現

在では、この時期に、将来のライフスタイル、財政、および定住地などについて検討し、これからの人生を準備しなければならない。

老年期の「1 引退に対処すること」は、なすこと (to do) から、あること (to be) への移行を意味している。職業の中心的役割はなすことであり、退職するまでは、なすことが志向すべき価値であった。退職後にも様々な活動に従事するが、それはなすためにではなく、あるために参加するのである。これからは、なすことよりも、あることに努めていかなければならない。「2 健康と体力の減退に対処すること」は、この時期に、人間の体のほとんど全ての細胞と細胞組織の老化が顕著になることと関連している。有害な物質が次第に蓄積されるようになり、栄養摂取のプロセスはスローダウンし、細胞は次第に自己再生能力を失ってくる。そして、騒々しい環境やストレスに満ちた状態から逃れるようになる。この時期は、このような老化のプロセスにそって、全ての活動を再調整していかなければならない。「3 高齢者集団と特別な関係をもつこと」は、自分が「高齢者」になったことを認めることを意味する。中年への執着を離れ、関心やテンポが自分に合った高齢者の集団に自分の居場所を見い出さなければならない。「4 満足する生活環境を確立すること」は、この時期に、通常、人々が生活環境を変えなければならないことに関連している。家族と同居するか、別居するか、あるいは高齢者のための集団住宅や施設に入るかなど、様々な生活環境のパターンがある。そして、どれを選んでも新たな問題に直面する。その中で、自分の満足する生活環境を確立していかなければならないのである。「5 配偶者の死に対処すること」は、配偶者の死によってひとりで生活していかなければならないことと関係している。配偶者の死は、悲しみや後悔といった感情を呼び起こすと同時に、ひとりで生活していく上での具体的な要求を提出する。生活費を削減したり、新たに家事をおこなわなければならなくなる。配偶者の死によって、孤独と様々な生活上の事柄への対処が要求されるのである。「6 完全性を維持すること」は、自分の死に直面することと関係がある。死後の世界に旅立つ上での心の支えをつくるために、自分の存在にいくらかの正当性を与える理論的根拠を見い出さなければならない。そして、そのためには、内省することが必要となるのである。

以上、成人の発達課題を、チックリングとハヴィガーストの研究に基づいて概観してきたわけであるが、これらの説明を、ハヴィガーストが約30年前に設定したものと比べてみると、かなり大きな違いがみられる。その第一の点は、時期区分の差である。「中年への過渡期」と「老年への過渡期」が新たに設定されており、ライフサイクルを安定期と過渡期の交互の出現によってとらえようとしたレヴィンソンらの影響がみられる。第二の点は、各々の課題の示す意味内容に変化が生じていることである。上の説明を見ると、それらの課題の多くが、意思決定や価値・態度に関連してい

ることがわかる。たとえば、表1にみられる成人前期の課題「1 パートナーを決めること」と「2 家族をもつこと」に対応する課題として、『人間の発達課題と教育』では、「配偶者を選ぶこと」と「第一子を家族に加えること」が設定されている。そして、その説明は、「結婚の相手を捜すという課題は、壮年初期の課題のうちで最も関心の深いものである」、「最初の子どもをうまくもうけること」であった。また、表1で新たに設定された、中年への過渡期と老年への過渡期の課題は全て、意思決定や価値・態度に強くかかわってくる。このような変化は、現代社会における、様々な事柄に対する選択可能性の増大、価値観の多様化、個人的期待の増大などによるものと考えられる。そして、そのことが、成人の発達課題の達成において、個々人の意思決定を強く要求し、意思決定をおこなうためには、自立性や主体性が特に重要である。以上のような意味において、現在、発達課題の達成は、ますます複雑、困難になってきている。発達課題を成人の学習内容としてとりあげる今日の意義は、ここにあると思われる。

(二) 発達課題に基づく成人の学習内容

それでは、このような発達課題の達成を援助する学習内容とは、どのようなものであろうか。中年への過渡期の発達課題のひとつである「職業プランを変更する」という課題に対応した、「中年のキャリアプランニング・ワークショップ」の実践を例として考察していきたい。

このワークショップは、職業の変更を考えている人々を対象としており、参加者のこれまでの経歴や現在の状況や教育レベルなどは問わない。実際の参加者は、その3分の1以上が、何年間か専業主婦をしていて、現在、その他の領域にも進出したいと思っている女性、約3分の1が、すでに職業の変更を決めていて、その目的をうまく達成するためのシステムやプロセスを捜している人、そして、その後の残りの人は、現在の職業に不満を感じ、他の職業を選択する方法を捜している人々であった。このワークショップは、次に示す3つのステップからなる一連のプロセスにそって実施される。第一のステップにおいて、参加者は、「私は何がしたいのか」という質問に答えることを求められる。この段階で、参加者は、自分は何を最も楽しんでできるかを本当に知るのである。第二のステップにおいて、参加者は、「私はそれをどこでしたいと思っているのか」という質問に答える。この段階で、参加者は、楽しんで働いている人々、楽しんで働ける組織、自分にとって意味ある活動、自分が真にもちたいと思っている生活条件など、多くの価値を明確化する。第三のステップは、どのようにすれば自分たちが捜しているものを見つけることができるかを、検討する段階である。実地調査の技術、連絡の取り方、人々の注目を集める方法などを学習

し、実際の实地調査、すなわち自分が希望している職業の関係者と直接会って話をする機会をもつのである。以上のプロセスを達成するために組まれたスケジュールは、表2に示す通りである。

表2 ワークショップのスケジュール

セッション1 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・プロセス、参加者、リーダーの紹介 ・プロセスの説明 ・生活と仕事環境の選択
セッション2 (3時間, 1週間後)	<ul style="list-style-type: none"> ・技能の理論や意義について ・技能確認のプロセスへの導入 ・实地調査の技術への導入
セッション3 (2時間, 次の日)	<ul style="list-style-type: none"> ・生活の目的と価値について ・職業の選択可能性に焦点をあてた、関心や趣味の利用方法 ・実際の实地調査 ・技能確認の続き
セッション4 (6時間, 次の日)	<ul style="list-style-type: none"> ・技能確認のまとめと技能の優先づけ ・仕事の目的について ・連絡の取り方 ・实地調査の続き ・行動に向けての現実的なプランづくり

ここで紹介した「中年のキャリアプランニング・ワークショップ」の実践からもわかるように、発達課題の達成を援助する学習は、現在の成人の発達課題の特徴として先に指摘した、意思決定や価値・態度の明確化のプロセスを援助するものでなければならないのである。「職業プランを変更すること」に関していえば、最終的には、職業技能訓練や就職斡旋のサービスなどとの連携が重要になってくるであろうが、そこにいたるまで

の過程における教育的援助も不可欠なのである。

このような学習内容の編成においては、学校教育型の教科を基礎とした成人カリキュラム (subject-based adult curriculum) ではなく、人間志向型成人カリキュラム (people-oriented adult curriculum) が求められる。

以上述べてきたような、発達課題を基礎とした成人の学習内容は、一定の社会の中で、生き残る (survive) ための学習の内容であるといえよう。もちろん、成人の学習内容は、これだけに限られるものではない。しかし、今日の生涯教育要請の大きな背景には、このような学習の必要性の増大がある。したがって、発達課題に基づく成人の学習内容は、現在、成人の学習内容の中で、重要な位置を占めている。

とはいえ、成人の学習内容を発達課題によって決めていくことについては、問題がないわけではない。成人の生活を画一化し、成人の学習を管理化する危険性がある、という批判はよく聞かれる。また、個人差の増大、および非規範的生活事象 (non-normative life events) の発生やその増加は、成人期の特徴のひとつである。成人の

学習内容を考えていく場合には、このような問題への目配りも大切である。このことは、成人教育の文脈における、成人の個性化の問題を考えていく上でも重要なのである。

次に、以上のような、発達課題からのアプローチの問題点を補うのに役立つと思われる、トランジションの考え方に基づくアプローチを試みることにする。

3 トランジションからのアプローチ

前章でとりあげた発達課題の概念は、最初は青年期を対象とした中等教育の研究から導き出され、その後、ハヴィガースト⁽²⁸⁾によって、それ以外の時期にも適用されるようになった概念である。したがって、この概念は、もともと教育と関連づけられていたものである。それに対して、本章でとりあげようとしているトランジションの概念は、成人期の研究から導き出されたものであるが、最初は教育と直接関係づけられた概念ではなかった。トランジションが、成人教育の文脈においてとりあげられるようになったのは、ここ10年ほどの間のことである。そこで、本章では、まず、トランジションが成人教育から注目されるようになっていくプロセスを概観することを通して、トランジションと成人の学習とはどのような関係があり、またトランジションは成人の学習内容とどのように関わっているのかを明らかにする。そして、そのようなトランジションの考え方に基づく、成人の学習内容について検討していきたい。

(一) トランジションと成人の学習

成人教育の文脈において、トランジションがとりあげられる出発点となったのは、シーヒーの次のような見解である。彼女は、「各パッセージ（トランジション）を、自分からすすんで通過し移動することは、豊かに生きようとする事なのである。もし我々が変化しないなら、成長もしない。もし我々が成長しないなら、真に生きていくことにはならない。」⁽²⁹⁾と述べ、それまで危機の時期と考えられていたトランジションを、成長の機会を提供するチャレンジの時期として積極的にとらえたのである。

このようなシーヒーの見解に注目し、トランジションを成人の学習と関連づけることに最初に成功したのがノックス（Knox, A. B.）⁽³⁰⁾である。もし、トランジションが、危機の時期であると同時に、成長の機会を提供するチャレンジの機会であるとするならば、トランジションへの各人の対処の仕方によって、トランジションをうまく乗り切ることができたり、それに失敗したりすることになる。そして、その成否が、ライフサイクルの次の時期における成功の程度を規定することになるのである。そこで、ノックスは、成人がトランジションに対処する方法として、6つの異なるパター

ンを明らかにし、その中から、トランジションを成功裡に乗り切るための積極的な対処方法のひとつとして、「教育活動」の重要性を指摘した。ここでいう「教育活動」とは、「体系的、持続的な学習活動によって、自分自身の能力を変えようとする目的的努力によって特徴づけられた」行動のことである。このことに関連して、ノックスは、トランジションへの対処の必要性が、「いくらかの成人に、教育活動に従事するための高いレディネスを生じさせる」と述べている。

以上のようなトランジションと成人の学習の関連性に着目し、それを実証的に明らかにしようと試みたのが、アスラニアンとブリッケルである。彼らは、トランジションと成人の学習の関係を説明する「過渡期仮説 (transition hypothesis)」を立て、それに基づいて、25歳以上の男女約2,000人にインタビュー調査をおこなった。その結果、過去12か月間に学習経験のある成人の83%が、生活変化、すなわちトランジションに対処するために学習していることが明らかになった。そして、それと同時に、それらの成人学習者の全てが、彼らが学習を始めたちょうどその時期に、学習することを決める引き金となった特別の出来事を経験していることがわかった。すなわち、トランジションが学習の必要性をつくり出し、ある特定の出来事が学習を始めるきっかけとなっているのである。

また、成人の学習内容と関連しても、興味深い結果が報告されている。それは、彼らの学習したトピック、すなわち学習内容は、その学習を始めるきっかけとなった特定の出来事とは必ずしも関連しておらず、その学習を要求したトランジションの種類によって規定されているということである。たとえば、「離婚」という出来事によって、それまで職業人でなかった人が、有能な職業人になっていくという場合、そこでおこなわれる学習の内容は、離婚という特定の出来事ではなく、有能な職業人になるという、トランジションの種類に関連しているのである。

以上の結果から、アスラニアンとブリッケルは、成人の学習の引き金となる出来事を知ることは、成人が学習するであろう「時期 (when)」——成人はいつ学習するのか——の予想を可能にし、成人の学習を導くトランジションの種類を知ることは、成人が学習するであろう「事柄 (what)」——成人は何を学習するのか——の予想を可能にすると結論づけ、「成人の生活スケジュールを知ることが、成人の学習スケジュールを知ることである」と述べている。

(二) ライフプランニングに関する学習

アスラニアンとブリッケルの研究からも明らかになったように、生活上の出来事は、学習の引き金となるが、必ずしも成人の学習内容を規定するものではない。たとえば、女性にとって、子育てが終わるという出来事は、しばしば重要なトランジシ

ンをもたらす。職業における、より以上の発展を目指す人もいれば、子育てによって仕事を一時中断していた人々にとっては、再就職を考える時でもある。また、地域活動に積極的に参加しようと思う人もいれば、趣味の拡大を望む人もいるであろう。そして、このような各人の選択の違いによって、そこでおこなわれる学習の内容が変わってくるのである。職業におけるトランジションを求める人は、新しい職業技能獲得のための学習をしたり、職業準備教育・訓練を受けたりするであろう。地域活動におけるトランジションを求める人は、社会問題や地域問題の学習、およびボランティアの技能獲得のための学習をし、趣味におけるトランジションを求める人は、その趣味に関する学習をするであろう。このように、学習の内容は、各人が選択するトランジションの種類によって決まるのである。

また、このような成人の学習に関連する生活上の出来事やトランジションには、予想可能なものも多い。上でとりあげた例などもそのひとつである。そして、予想が可能な場合は、前もって準備することができる。準備しながら、環境が整うタイミングを待つのが最も合理的である。

以上のようなトランジションの考え方によれば、成人の学習にとって、各人のライフプランニング、および学習プランニングが非常に重要なものとなる。成人は、各自のライフプランに基づいて、生活上の出来事やトランジションを予測し、それに必要な学習プランをつくることが可能であり、またその必要があるのである。

このようなライフプランニングの重要性に着目し、実際に、ライフプランニングに対する教育的援助をおこなっているものに、ブリティッシュコロンビア大学がバンクーバーの下町で実施している、女性のためのリソースセンターがある⁶⁷⁾。このセンターでは、年間80の短期プログラムが実施されると同時に、それと並行して、ライフプランニング・サービスがおこなわれている。このライフプランニング・サービスは、生活の目標を明確にしたり、それを達成するためのストラテジーを開発するための、ライフプランニング・インタビューと、支持的環境を提供するための、ライフプランニング・グループと、個人の特性や関心を明確にするための、心理テストの3つの部分からなっている。次にあげているのは、このセンターで実施されている、「成長と変化のための潜在能力の開発 (Developing Potential For Growth and Change)」というワークショップの、学習者向けの紹介文である。少し長いが、このセンターの活動を的確にあらわしていると思われるので、全文引用する⁶⁸⁾。

成長と変化のための潜在能力の開発——変化について語ることはやさしい。しかし、それを達成することは困難であり、勇気と技能の両方を必要とする。このプログラムは、あなたがいかに変化を起こし、変化に対する家族や友人からの抵抗に対

応していけばよいか、ということを援助する。それは、自己認識とアイデンティティの重要性を探り、他の人を通して自分のことを知り、自信をつけようとするものである。

このコースは、支持的な雰囲気の中で、組織化されたグループ経験を通して学習するための、基礎的なイントロダクションとしてデザインされている。あなたは、自由にコミュニケーションしたり、もっと独断的になったり、葛藤や怒りを処理したり、集中したりするための、新しい方法を探り、あなたの生活状況を評価し、特定の変化に対するプランニングを始めるための日記を付けることを奨励される。構成と内容は、技能志向のものと、変化し成長するためのアイディアを豊かにするものの両方である。

〔注〕

- (1) レヴィンソン, 南博訳『人生の四季——中年をいかに生きるか』, 講談社, 1980年
- (2) 同書, p. 20
- (3) 同書, p. 20
- (4) 河合隼雄他編『ライフサイクル』(岩波講座・精神の科学・第6巻), 岩波書店, 1983年, pp. 11~20, およびレヴィンソン, 前掲書, pp. 467~471を参照
- (5) Chickering, A. W., and Havighurst, R. J., *The Life Cycle*, in Chickering, A. W., and Associates, *The Modern American College*, Jossey-Bass Publishers, 1981, p. 17.
- (6) レヴィンソン, 前掲書, p. 17, および池田秀男「ライフサイクル論」, 新堀通也編『社会教育学』, 有信堂, 1981年, p. 224
- (7) 池田秀男, 前掲論文, p. 245
- (8) 河合隼雄, 前掲書, p. 8
- (9) 同書, p. 9
- (10) 同書, p. 6
- (11) レヴィンソン, 前掲書, p. 18, 池田秀男, 前掲論文, p. 246, 河合隼雄, 前掲書, p. 3, および Chickering, A. W., and Havighurst, R. J. op. cit. p. 18を参照
- (12) エリクソン, 仁科弥生訳『幼児期と社会』, みすず書房, 1977年, p. 351, および池田秀男, 前掲論文, p. 247
- (13) Neugarten, B. L. (ed.), *Middle Age and Aging*, University of Chicago Press, 1968.

- (14) Gould, R., The Phases of Adult Life ; Study in Developmental Psychology, American Journal of Psychiatry, Nov. 1972.
- (15) シーヒー, 深沢道子訳『人生の危機・パッセージ』Ⅰ・Ⅱ, プレジデント社, 1978年
- (16) レヴィンソン, 前掲書
- (17) 同書, p. 68
- (18) ハヴィガースト, 荘司雅子訳『人間の発達課題と教育』, 牧書店, 1958年
- (19) 倉内史郎『社会教育の理論』(教育学大全集・第7巻), 第一法規, 1983年, p. 77
- (20) レヴィンソン, 前掲書, および三浦清一郎『成人の発達課題と生涯教育』, ぎょうせい, 1982年, p. 100。トランジションという用語の使い方自体が, 研究者によって異なっているので, 訳語を統一するのは困難である。
- (21) Aslanian, C. B., and Brickell, H. M., Americans in Transitions ; Life Changes as Reasons for Adult Learning, College Entrance Examination Board, 1980.
- (22) Chickering, A. W., and Havighurst, R. J. op. cit. p.31.
- (23) Ibid. pp. 30~48. を参照
- (24) レヴィンソン, 前掲書
- (25) ハヴィガースト, 前掲書, pp. 276~277
- (26) Deems, R. S., Mid-career Planning workshops, in Knox, A. B., Programming for Facing Mid-life Change, Jossey-Bass Publishers, 1979.
- (27) Parrott, A., A Curriculum Fit for Adults?, in Adult Education, Vol. 56, No. 2, September 1983.
- (28) Schaie, K. W., and Willis, S. L., Life-span Development, in Harold, E. M. (ed.), Encyclopedia of Educational Research, Free Press, 1982. pp. 1099~1101.
- (29) ハヴィガースト, 前掲書, pp. 324~328
- (30) Sheehy, G., Passages : Predictable Crises of Adult Life, Bantam Books, 1976, p. 513.
- (31) Knox, A. B., Adult Development and Learning, Jossey-Bass Publishers, 1977.
- (32) Ibid. p. 538.
- (33) Ibid. p. 538.
- (34) Ibid. p. 539.

- ㉔ Aslanian, C. B., and Brickell, H. M., op. cit. pp. 33~39. なお, 三浦清一郎, 前掲書, pp. 104~105にも紹介されている。
- ㉕ Aslanian, C. B., And Brickell, H. M., op. cit. p. 61.
- ㉖ Ironside, A., and Buckland, C. M., The Women's Resource Center, in Knox, A. B. (ed.), op. cit.
- ㉗ Ibid. p. 61.